

## 縄文時代前期後半から中期初頭にかけての一資料

—千葉県宝導寺台貝塚出土の資料を礎にして—

寺 門 義 範

### I はじめに

さきに筆者は、「千葉県下における縄文時代前期後半期の諸問題(1)」と題する論文を提出し、千葉県という、自然条件的にも行政的にも限られた地域における縄文時代前期後半の文化を理解するためには、その地域相にみあった該時期文化の吟味検討を通じて、いわゆる諸磯式土器文化と浮島式土器文化とが、どのような形をもって地域の中で融合し、かつ生成・展開していったのかを、整理解釈する必要性があることを説いた。しかもその文中、まず前提として、千葉県下における該時期文化に関しての研究の推移と、それらの遺跡立地の問題を含んだ集散の傾向等について、私見を述べてきた。

そこで本稿にあっては、このような研究をさらに推し進め、将来、縄文時代前期後半期の土器様相検討への一助とするべく、扱う資料をその文化的な流れの中において、位置づけようとするものである。

なお、ここで扱う資料のベースは、千葉県宝導寺台貝塚出土の資料であり、これらは昭和43年に行なわれた調査によって出土したものである。

さて、この宝導寺台貝塚については、すでに庄司 克氏によってその概要が報告されておりここで改めて詳述するまでもないが、報文を要約すると次の2点の事柄について明らかにされている。

すなわち、その第1としては立地上の特異性である。つまり本遺跡は、都川本谷と葭川とに挟まれた舌状台地の突端裾部に発達した沖積低地（標高7～8m）上に形成された遺跡で、当時の海汀線に直接面していたと考えられることである。このことは調査をした第Ⅴトレンチの観察からも明らかなことで、2m余の表土層を取りのぞいた下の包含層は、純貝層を主とした貝層と焼貝層、さらに灰層とが複雑に重なりあい、1.5～2.5m余の層厚をもっていたとされている。しかもこれらの状態は、带状堆積を示し、層中にしばしば赤褐色の酸化鉄の附着しているのがみられ、あたかも貝層形成時に長期間にわたって海水につかっていた形跡があるとしている。

また、これらの貝層中の一部に火を焚いたと思われる明らかな痕跡があることから、隣接する台地上からの投棄によって形成されたものではなく、最初からこのような海岸低地に営まれていた貝塚遺跡であることを示唆した。

第2には、出土した遺物についての問題である。特に土器・石器の人工遺物が調査面積の割には極めて少量であることに注目し、中でも土器においては、縄文前期前半黒浜式期のものから中期後半加曽利Ⅱ式期のものまで、間断なくその資料が含まれているにもかかわらず、型式ごとに個体数が限定できるほどの割合しか出土しておらず、その出土傾向も純貝層以外の混土貝層や灰層、泥炭層中に投げ捨てられたような状態で、小砂片のまとまりとなって検出されたとしている。また、石器類にあっても調理加工具のみで利器の存在が皆無という偏在傾向がみられた。

このような事から、同氏は『まとめ』として宝導寺台貝塚の性格を『……その立地条件や貝層の堆積状況あるいは遺物の出土状況からみて集落遺跡とは考え難い。』として、「作業址」ひいては「生産遺跡」の存在を示唆しようとしており、当遺跡が特殊な、特定の目的の下に営まれていたと理解しようとしているのである。

## Ⅱ 宝導寺台貝塚出土の資料

すでに述べたように、宝導寺台貝塚からは前期前半期から中期後半期におよぶ資料が、ほぼ継続して出土している。本稿ではこれらの資料のうち、そのテーマでもうたっているように、前期後半から中期初頭ののものまでに焦点を絞り、その器形・文様組成の上から観察をしていくことにする。

なお資料は、便宜的に従来の型式群によって次のごとく大別し、さらに類別して述べることにする。

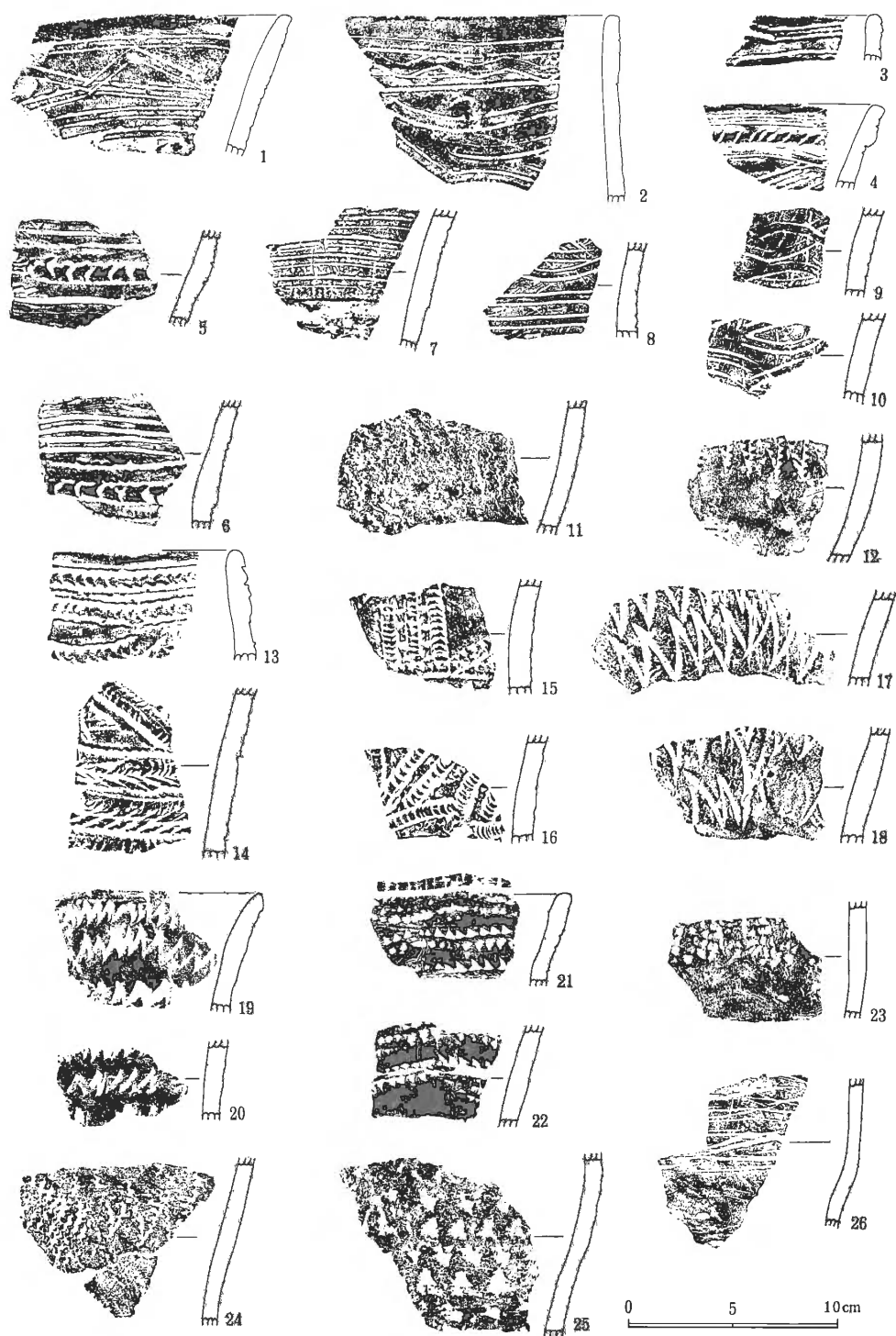
- A 所謂、浮島式土器群に含まれるもの、ないしはそれに比定できるもの。
- B 所謂、諸磯式土器群に含まれるもの、ないしはそれに比定できるもの。
- C 前期最終末に位置づけられると考えられるもの。
- D 中期初頭に位置づけられると考えられるもの。

### A 所謂、浮島式土器群に含まれるもの、ないしはそれに比定できるもの(第1図 1～25 第2図 27～29 第3図 63 第4図 71～74)

本遺跡において、目立って多い出土量を示している土器群である。以下7類に分けて述べることにする。

#### 第1類 (1～6、26)

半截利用の平行沈線によるモチーフ文様をもつグループである。口縁部破片は図示した4例



第1図 宝導寺台貝塚出土の土器(1)

のみであるが、このうち 1、3・4 は口縁外反し、2 のみが直口に近い口縁形態を示している。器形はいずれも平縁の深鉢と考えられる。モチーフ文様は半截竹管工具によるもので、口辺から胴上部にかけて平行沈線のほか鋸歯状、波状、それに弧状などの文様を組合せて横方向に施すのを特徴としている。また 5・6 については有節平行沈線文も併用している。さらに、この平行沈線文に併せて低隆起帯をもつものもあり、口辺の低隆起帯上にヘラ状工具による刻目を施すもの(4)、胴部のそれに爪形文を施すもの(5・6)とがみられる。焼成は概して良好であり、胎土の粒子は細かい。

## 第2類(7~10)

まばらな撚糸文と半截利用の平行沈線によるモチーフ文様とが組合されたものである。いずれも深鉢の胴部破片と考えられるもので4例ある。地文であるまばらな撚糸文は、細目の撚り原体を軸に巻きつけて縦方向に回転させており、その上に横走する半截平行沈線文を施したり(7)、半截利用のレンズ状モチーフ文を施したり(8~10)している。焼成は第1類と同様良好である。

## 第3類(11・12、71)

稚拙な波状貝殻文と幅狭な変形爪形文との組合せをもつグループである。資料はいずれも胴部破片のみで、器形を推量できるものは71の1例だけである。本グループの主文様である波状貝殻文についてみると、施文貝としてハイガイ・サルボウなどの放射肋の発達したアナグラ属の貝殻を主に利用し、器面に対して腹縁の支点を交互に変えることによって連続的に横走施文したもので、施文手法も比較的大型貝を使用していることから、浅く稚拙である。

そこで、器形がある程度推量できる71を例にして、その文様組成を観察してみよう。現存高14cm余、残余最大径は胴部で21cmを計る深鉢の胴下部と考えられる資料である。文様は器一面に地文としての稚拙な波状貝殻文をもち、胴部に二条の半截利用の幅狭変形爪形文を施している。類推するに、胴上部には幅狭な変形爪形文と半截平行沈線によるモチーフ文様が施されていたのであろう。胎土、焼成ともに良好で堅牢さがみられる。

## 第4類(13~16)

幅広の変形爪形文をもつものである。いずれも胴上部破片で口縁部は13の1例のみである。文様は、地文はなく無文地の上に幅広の変形爪形文を直線的、曲線的に配しモチーフ文様を作り出している。この幅広の変形爪形文については、本来的には単独で文様を形づくるものではなく、次の類で述べる波状貝殻文や平行沈線文との組合せによって文様構成をもつものと考えられるが、本遺跡では良好な資料に恵まれなかったことから敢てここに独立させて一類を設けることによって記述しておく。

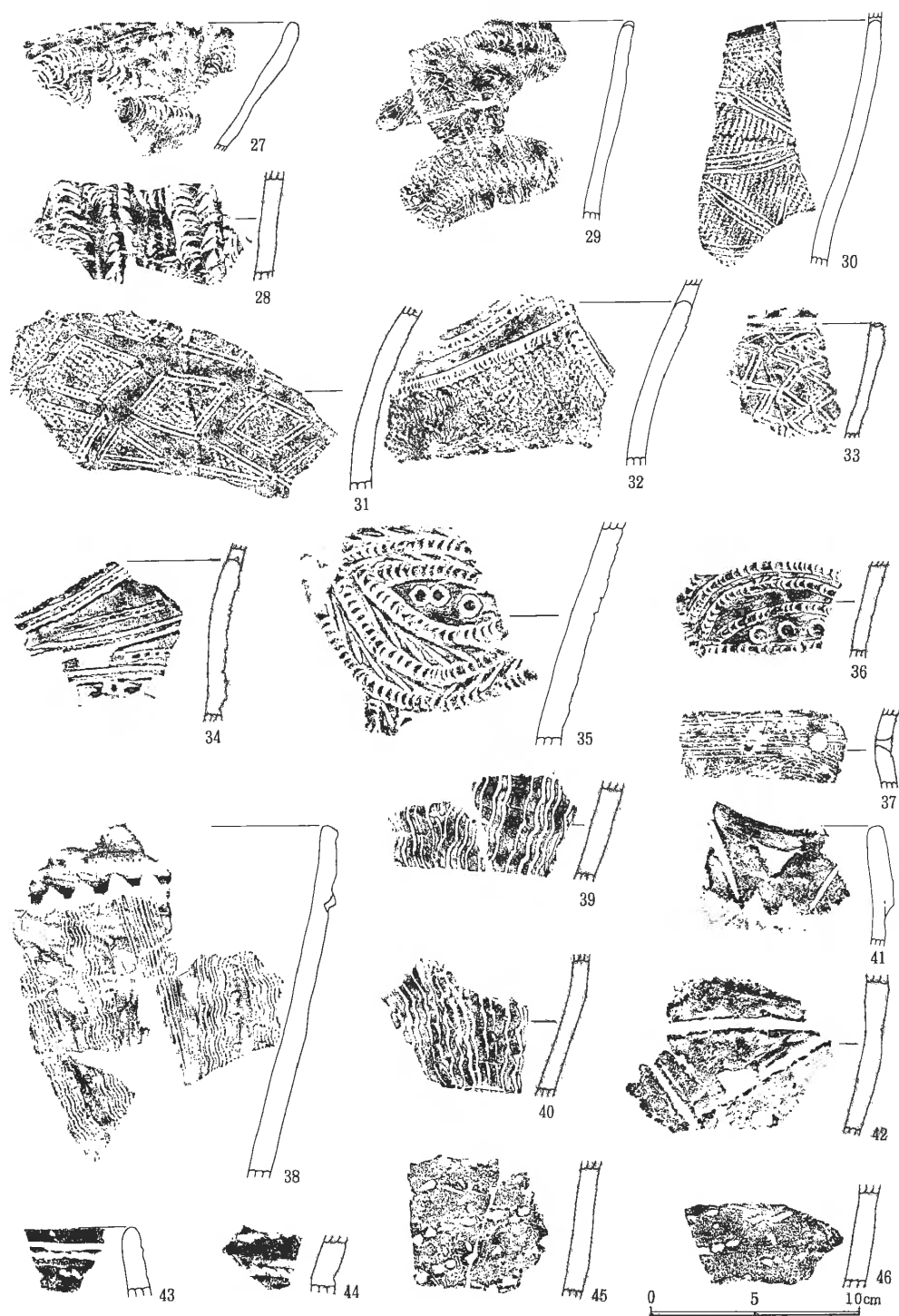
なお、15・16の資料についてはその文様モチーフから、もしかすると諸磯Ⅱ式の系譜に属するかもしれない。

## 第5類（72）

地文としての波状貝殻文と幅広の変形爪形文とを組合せたものである。本遺跡では図示した1例のみである。資料は底部が欠損しているものの全体の $\frac{1}{3}$ 余があり、器形復原ならびに文様施文順序がわかる良好な資料である。現存高25cm余、口径39.8cmを計る。形状は口縁に最大径をもち、胴下部にかけて緩く湾曲しながら裾絞りに絞られ、底部付近に至って直立すると考えられる深鉢で、口唇に直交して3個一単位の山形突起をもっている。文様組成は胴中程の低隆起帯以下の胴下部に地文として二枚貝の腹縁による波状貝殻文を密に施し、その上に低隆起帯を境として、上下対象となるような二条を単位とする幅広の変形爪形文を配している。すなわち胴中の低隆起帯を起点に、それぞれ口縁と胴下部くびれ部分とにむけて、一条の平行する変形爪形文、次いで二条の弧線状変形爪形文、そしてさらに二条の平行変形爪形文を施文し、主文様を形づくっているのである。しかも、胴中部の低隆起帯上には断面丸形のヘラ状工具によって左傾乃至は右傾の押捺を繰り返し、さらに同じ施文具を用いて、口縁肥厚部分にも鋸歯状の押捺を連続的に充填している。焼成は良好といえるが、胎土には砂粒を含んでいる。

## 第6類（17～28、63、73・74）

波状貝殻文と波状貝殻文の変形したものを含むグループである。本遺跡における浮島式土器群中、最も多い量を示している。本類にみられる波状貝殻文は二枚貝とハイガイ・サルボウなどのアナダラ属との両者の貝殻を施文具として使用しており、第3類の稚拙な波状貝殻文に比べると、明らかにその施文技法に熟達のあとをうかがわせるものがある。まず二枚貝による波状貝殻文を施したもののとして17～20、27・28それに73の資料をみることができる。このうち、17・18は大型の二枚貝を使っているもので、器面に対して豪放且つ上下の間隔を密に施文している。また、19と20、27と28の資料はいずれもそれぞれ同一個体と考えられる資料であり、前者については口縁が緩く外反する深鉢で、施文されている波状貝殻文も73の資料とともに、17・18の資料とは異なる小型の二枚貝によって、器面に深く且つ上下の間隔を開けて施文するのを特徴としている。また後者にあつては、口縁が強く外反する深鉢形を呈し、口辺に弧線状の波状貝殻文を横走させ、胴部には貝殻による三角文を間隔をもって縦に配し、その間を波状貝殻文によって充填するモチーフ手法をとっているものである。このように、同じ二枚貝を使用している波状貝殻文であってもその施文技法に多少の差が認められ、そこに相互の資料の時間的差異をみることができるようである。そこで、器形復原の可能な73の資料によって、その形態的特徴をみてみよう。資料は現存高20cm余、口径20.6cmを計る深鉢で、胴中程に最大径をもっている。文様は器面に縦方向のヘラ削り痕を残し、その上に2.5cm～3cmあまりの間隔をもって横方向の波状貝殻文を数段施している。しかも、口辺に沿って幅2cmあまりの粘土の帯を巡らしそこに無文帯を作り出している。この無文帯は器面に施した波状貝殻文を強調するための補足的効果をはたすとともに、器形的にも安定性を与えるものとなっている。焼成は良好と



第2図 宝導寺台貝塚出土の土器(2)

いえるが、胎土中には砂粒を多く含んでいる。

次にハイガイ、サルボウなどの属で波状貝殻文を施したものであるが、23・24、63の3例を図示した。23・24はいずれも胴部破片のために器形は定かではないが、63の資料が深鉢の口縁部であり、同様に深鉢の破片とも考えられる。文様は支点を変えながら施される波状貝殻文を幾分引きずったごとくの施文技法をみせている。

また、21・22、25それに74は所謂三角文の土器である。21と22は同一個体の資料で深鉢形を呈し、表裏研磨の優れている資料である。これらの三角文は二枚貝乃至はハイガイ・サルボウなどのアナグラ属の貝殻や、先端を角ばらした半截竹管などを工具として、支点を変えながら押捺する変形爪形文、波状貝殻文の技法を用いて施文しており、図示した資料にもそのいずれもが存在している。その上、21・22は口唇に刻目を附したものである。なお、74の資料は器形復原のできるもので、口縁が緩く外反した深鉢形を呈し、現存高26cm余、口径24.1cmを計る底部欠損の土器である。文様は小型の二枚貝の腹縁によって器一面に横走する三角文を施し、73の資料と同様、口辺に巡らした1.5cmあまりの粘土の帯で無文帯を形づくっている。焼成はあまり良好とはいえず、砂粒が胎土には多く含まれている。

#### 第7類（29）

波状貝殻文と平行沈線とを組合せた資料である。図示した例のみである。口縁直口に近い深鉢形を主としており、本土器群にはめずらしく小波状口縁をもっている。文様は二ないし三条の平行沈線を、器面に対して無作為的ともみえるごとく縦横方向、斜方向に施し、その上からアナグラ属の貝殻による波状貝殻文を口辺に一条、胴に一ないし二条横走させている。焼成はあまり良好とはいえず、胎土には砂粒を多く含んでいる。

以上、浮島式土器群とそれに比定できる資料を7類に分けて観察した。これらのうち量的に最も多い数値を示していたのは、第3・4類と第6類のグループのものであった。そこで、まとめの意味から、これらをその器形、文様組成の特色から以下、時期ごとに分けてみることにする。まず第1類の1～6とした半截利用の平行沈線をもつグループと第2類のまばらな捺糸文と半截利用の平行沈線文のグループ、さらに、第3類の稚拙な波状貝殻文と幅狭変形爪形文の組合せられたものは、浮島Ⅰ式に含められるものである。また第4類の幅広変形爪形文のものと第5類の波状貝殻文と幅広変形爪形文との組合せ、そして、第6類17・18としたものは浮島Ⅱ式と考えられる。さらに、浮島Ⅲ式に比定されるものとしては、第1類の26とした平行沈線文の土器と、第6類の17・18の資料をのぞいた波状貝殻文のグループ、それに第7類の波状貝殻文と平行沈線を組合せたものがあげられる。このように、本遺跡出土の浮島式土器群とされる資料は、いずれも浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の範疇に含めることができ、後続する興津式の明らかな存在をみることはできなかった。これが何に起因するものであるかは、出土資料の極少ということもあり、ここでは触れずにおくことにする。

**B 所謂、諸磯式土器群に含まれるもの、ないしはそれに比定できるもの（第2図 30～37 第4図 75）**

本群は出土量は極めて少なく、個体数的にも図示したものがその大半である。大別して4類に分ける。

**第1類（30～32）**

爪形文とR撚りの細かい斜縄文との組合せ文様をもつグループである。30と32の2例は波状口縁をもつ深鉢と考えられる口縁部破片で、31は胴部破片である。文様はいずれも地文に粒の細かいR撚りの単節斜縄文をもち、その上に口縁部破片では、口辺に沿って二条の爪形文、その下部では31のごとく菱形状区画文や30の平行線文を施している。なお、32の資料では地文の斜縄文の上に半截工具の背と思われる部分を使った押しびき痕がのこされている。焼成はいずれも良好であり、胎土も緻密である。

**第2類（33）**

半截利用の平行線文の土器である。1例のみ出土している。平縁の口縁部で、直口に近い深鉢を呈する。文様は、やはり地文をもたず、口辺に沿って一条の半截利用の平行線を廻らし、その下の胴下部に向って縦方向の鋸歯状平行線を菱形に施したものである。焼成は比較的脆く胎土にも砂粒が多く含まれている。

**第3類（34～36）**

爪形文の土器グループである。口縁形状のわかるのは34のみで、波状口縁を呈しており、他の2例は胴上部破片である。いずれも地文はなく、直接器面に爪形文を施している。34の例は口辺に沿って一条の爪形文を廻らし、胴部の低隆起帯上半截刺突にいたるまでの空間を半截平行線と爪形文とで充填しているものである。また、34・35はレンズ状に爪形文を重畳して廻らし、その中に円形竹管刺突を施して、モチーフ文様を作り出しているものである。いずれも焼成は堅牢であり、胎土も微砂を含んでいるにすぎない。

**第4類（37、75）**

櫛歯状の工具によって主文様を描出しているグループである。図示した2例のみがある。器形がわかるのは75の例だけであるが、37の資料も同種のものと考えられる。そこで75の例からその形態、文様要素を観察してみる。現存高7cm余、口径17.8cmを計る広口壺風の形状をもつ。文様は集合条線を、口辺付近では上向弧状と縦に、頸部付近では横方向に、さらに胴部では間隔をもって縦に配し、その間を綾杉状ないし菱形状に充填施文している。なお、口縁の一部に補修孔と考えられる焼成後穿孔がみられる。焼成は37とともに良好で、胎土も緻密である。

これら諸磯式土器群は前述のごとく、出土比率も少なく、とても土器の文様組成のすべてを語るまでにはいたらなかったが、総括すると第1類の爪形文と斜縄文の組合せをもったものと、第2類の平行線文の土器が諸磯a式に比定できる。また第3類の爪形文のグループが諸磯b式

に、第4類集合条線文のものが諸磯c式とそれに比定される土器群と考えられる。しかし、そこには諸磯b式に特徴的な浮線文を施したグループのものが1例もみられず、該時期の遺跡としては特殊な位置を占めていたことが予想できるようである。

**C 前期最終末に位置づけられると考えられるもの（第2図 38～46 第3図 47～62 第4図 76～78、80）**

本遺跡から出土した土器群のうち、本群が最も大量に検出された群である。器形はほとんどが深鉢形と考えられ、器形的なバラエティに乏しい。以下その文様から7類に分けて述べることにする。

**第1類（38～42）**

三角状彫刻文および三角状彫刻文と櫛歯条線文との組合せがみられる類である。図示した3個体が検出されている。まず38は口縁の部分がわずかに残っている資料で、器形は口縁直口に近い深鉢形を呈している。文様は口辺部に巡る粘土帯の下半部分に連続的に三角文の刻目がつけられ、その下から胴下半にかけて十条の櫛歯状工具によって、直線的あるいは左右の支点をかえながら引いた連続波状的施文がみられる。また39と40は同一個体の土器で、38の櫛歯状工具にかえて、半截竹管によって連続波状的施文をしたと考えられる資料である。41・42も同一個体である。41は波状口縁であるが口縁が直口に近く立ち上っている以外、全体的にどのような器形のものかは定かではない。文様としては口辺部に巡る粘土帯下半に38と同様の三角状刻目を施し、丸ペラ状工具で描く幾何学的な区画内に三角状の彫刻文を刻み込んだ資料である。焼土は全体的に良好であるが、41・42については胎土に小砂利を多く含んでいるのが目立っている。

**第2類（43・44）**

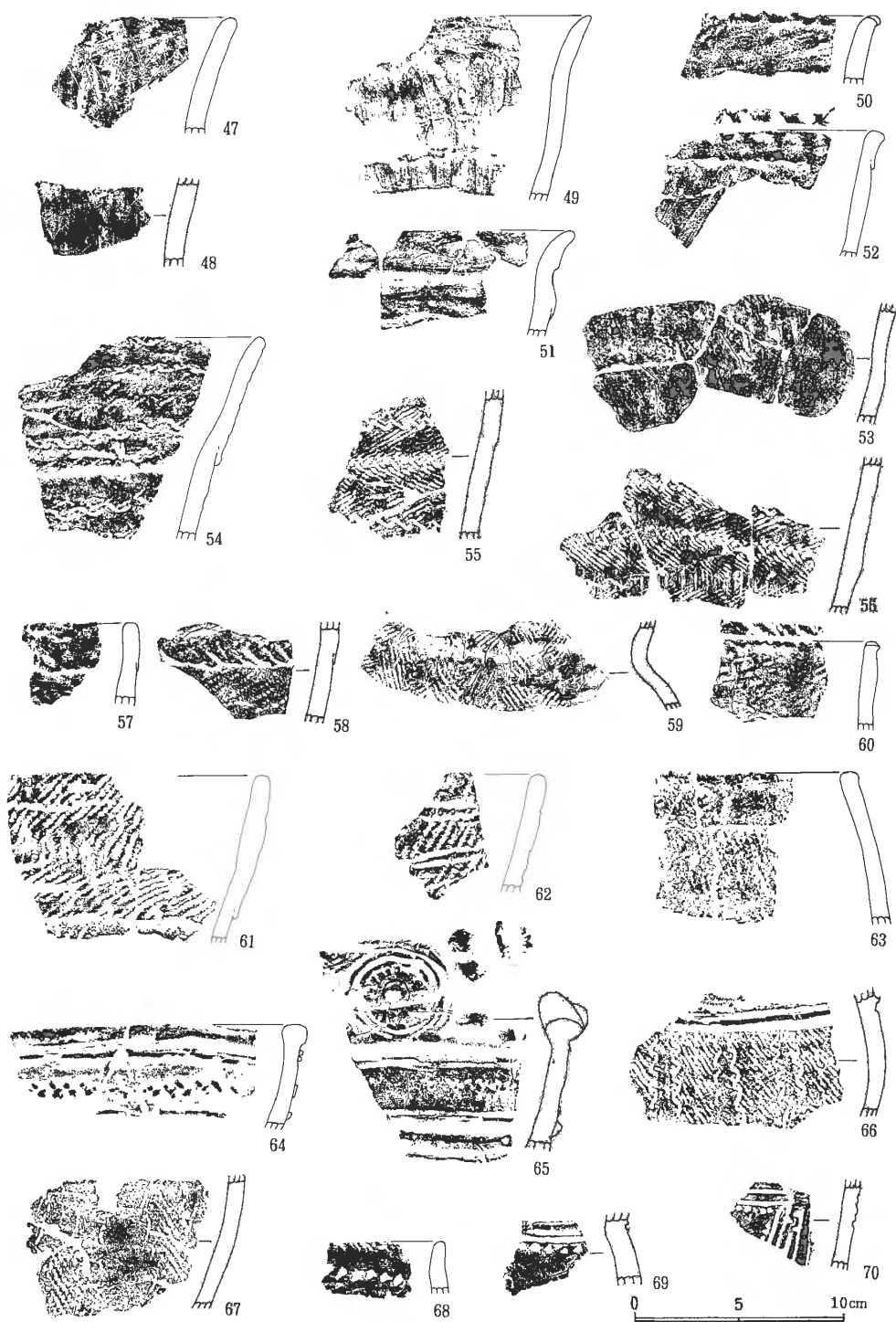
側面圧痕のあるグループである。本遺跡では出土量が少なくわずか2例を数えるにすぎない。図示した資料は同一個体のものと考えられ、43は口縁部、44は胴部の細片である。文様は口辺に一条沈線を巡らしその下に平行してR撚りの単軸の原体が間隔をあけて押捺されている。なお、胴下半は不明であるが、回転縄文が付けられる例が多い。焼成、胎土ともに良好である。

**第3類（45・46）**

点列文をもつ類である。図示したのは同一個体の破片であるが数片ある。いずれも胴部破片のため器種は不明であるが、深鉢形を呈するものであろう。文様は無文地の上に間隔を開けて横走る浅い点列を施したものであり、施文工具は丸ペラ状のものであったと考えられる。焼成は堅牢であり、胎土も緻密である。

**第4類（47・48、79）**

無文地の上に鋸歯状ないし弧状のモチーフ文様をもつグループである。図示したものは3例



第3図 宝導寺台貝塚出土の土器(3)

のみであるが、このうち47と48は同一個体の資料である。器形は両者とも口縁の外反する深鉢形で、比較的小型の土器である。また、これら2個体の土器は、第5類で述べようとしている縦ないしは斜行するヘラ削り痕を、その整形段階において器面にのこし、文様施文はその上から行われている。その文様は、47・48の資料で先の細く尖ったヘラ状工具を使用しており、まず口辺に沿って鋸歯状の陰刻を施し、胴部には斜め横の交差する直線を配している。また79は器形がある程度復原できた資料であり、現存高12cm余、口径16.0cmを計っている。器面全体は半截竹管によって弧状平行線を施し、口唇に同一施文具の刻目をつけている。焼成は両者とも良好で、胎土も緻密といえる。

#### 第5類（49～53、76・77）

無文の土器である。本群中結節のある縄文のものとともに、その占める量的割合は最も多いグループである。器形的には大部分が平口縁の外反する深鉢形を呈すものと考えられるが、中には浅鉢形のものもあるかもしれず、その細部において、少しずつ形態的な相違がみられる。文様といえるべきものは、もともと皆無であるが、図示した資料でも明らかなように、器面には整形時における縦ないしは斜めにはしるヘラ削りの痕をのこしているのが特徴である。しかも50・52の資料のように、口唇にヘラ状工具による押捺痕をもつものや、口辺に2～4cm余の粘土帯を廻らしたもの（51・52、76）などがある。

76の例は、これらの資料の中でも比較的形態の明確なもので、現存高8cm余、口径20.5cmを計る深鉢である。器一面に幅1cm余の縦走するヘラ削り痕をのこし、部分的にその上に撫でを加え、粘土のえぐれを整えており、口辺には幅2cm余の粘土帯を指で表面を押えながら廻らし、口唇はヘラで削って整えている。焼成は良好といえるが、胎土には石英・長石片を多く含んでいる。また、77は深鉢の胴部と考えられる資料であるが、器面には斜行して幅1.5cm余のヘラ削り痕が荒々しいタッチで残されており、この整形痕は器内面にまでおよんでいる。焼成は76の資料に比して堅牢であり、胎土も緻密である。

#### 第6類（54～59、78、80）

縄文をもつグループである。量的に極めて多い数値を示している。器形は54、57、78の例でも明らかなように主として平口縁の単純な深鉢と考えられ、いずれも口辺外側に粘土帯を廻らし、複合口縁様にしている。文様は単節のL撚りの斜縄文にS字状結節を数段にわたってもつもの（54）や、L・R撚りの結束第1種で羽状縄文をつくり、そのL撚り部分にS字状の結節を付すもの（55・56）、それに単節L撚り斜縄文を施すもの（57・58）、単節L・R撚り結束第1種のもの（59）などがみられる。しかも、54、59の2例は明らかに縄文施文後、その一部を磨消した痕跡もある。また同一個体である57・58には、口辺に廻らされた粘土帯の下半を爪形様に押えつけたものもある。焼成はほぼ良好の部類であるが54～57の資料には雲母・石英粒が目立って含まれている。

本類である程度器形のわかるものは78と80の資料である。まず78は平口縁をもつ深鉢で、現存高18cm余、口径26.2cmを計る。形状は本類に特徴的な幅広の粘土帯を口辺外側に廻らし、器面全体に単節し撚りの斜縄文を施している。なお、胴部には器面整形時についた縦にはしる粗いへら削りの痕をのこしている。また80の資料は、深鉢の胴下半と考えられる資料で、やはり縦走するへら削り痕をのこし、その上にし撚りの無節斜縄文を施文している例である。焼成は両者とも良好であり、胎土は微砂を含んでいるが緻密といえる。

#### 第7類（60～62）

縄文と側面圧痕の組合せをもつ類である。図示した3例がある。このうち61と62は同一個体の資料と考えられるところから、実際には2個体の存在のみということになる。器形は、単純な平口縁をもつ深鉢を呈するものと思われ、文様は器面にし撚りの無節斜縄文をもつもの(60)と単節斜縄文をもつもの(61・62)とがある。側面圧痕は口辺に一～二条押捺され、60の例では口唇部にも原体の圧痕がみられる。なお、61・62の資料のように口辺外面に幅広の粘土帯を廻らして、複合口縁様にしたものもある。焼成は両者とも良好であり、胎土も緻密である。

以上、前期最終末に位置づけられると考えられる土器群について、主にその文様組成の上から観察してきたが、総じて本資料をみるかぎりでは、基本的に第5類で代表される無文地のグループと第6類に代表された縄文をもつグループとの2つの系統の存在を考えるとすることができるようである。すなわち無文地のグループに含まれるものとしては、第5類のほか第1類の三角状彫刻文と櫛歯条線文との組合せをもつ類、第3類の点列文の土器、それに第4類の沈線文ないし平行線文をもつ類があり、一方縄文をもつグループには、第6類以外に第2類の側面圧痕の土器と第7類とした縄文に側面圧痕を組合せた土器群があるのである。

しかし、該時期の器形や文様組成を含めた土器そのものについては、未だその在り方や時期的な位置づけなどに不鮮明な部分が多く、ただちにここで、本遺跡出土の資料のみによって、この予測を主張するものではない。今後の資料累積の中において明らかにされるべき課題と考えられる。

そこで、本土器群をまとめる意味で、個々の資料に共通している様相について触れておくことにする。まず器形は、その大部分が外反する平口縁をもつ単純な深鉢形を呈していることであり、特色ある器形のものとしては59のごとき頸部を絞った広口壺風の器形のものが1例みられるにすぎない。このことから器形的なバラエティに乏しい土器群といえる。また文様的には、十三菩提式の流れをくむと考えられる三角状彫刻文と三角状の陰刻、それに、東関東地方の中期初頭に位置づけられる下小野式への継がりをもつと考えられる結節のある縄文を施文したものが大部分を占めている。しかしそこには該時期をはさむ前後の時期にみられるような装飾的かつ複雑な組合せをもつ文様がほとんどみられず、何か前後の時期とは系統を異にする土器文様の一群という印象を強く受ける。その反面、製作・整形技法には顕著なものがあり、一種独特のものをもつ

ている。つまり、口辺外面に幅広の粘土帯を廻らし、複合口縁様の作出をしたり、器面にヘラ状工具による縦ないし斜行する荒々しい整形痕をのこすことを特徴としており、その所作が、製作者によってある程度意識的に行われていたとみられる節があることである。はたしてこれが、何に因るものかは定かではないが、それによって該土器群の装飾文様の効果を表現しようとしたらしいことは確かなようである。

#### D 中期初頭に位置づけられると考えられるもの（第3図 64～70 第4図 81・82）

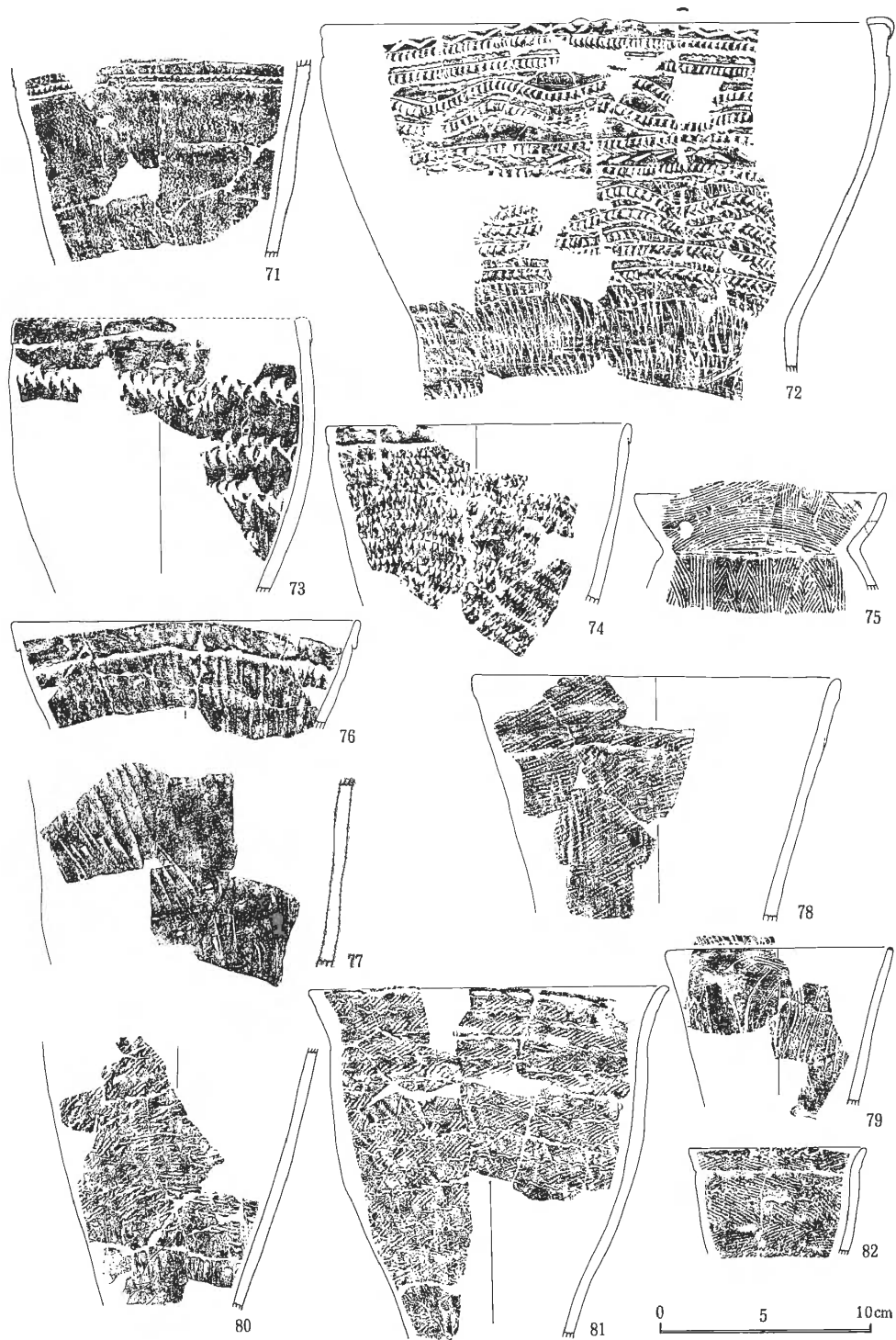
出土量は、他の土器群に比較すると必ずしも多いほうではなく、破片がほとんどで実測可能な資料は2個体のみである。その文様組成から3類に分けて述べる。

##### 第1類（64～67）

粘土紐貼付によるモチーフ文様と縦の結節を有する縄文の組合せをもつグループである。個体数は少ない。図示した資料の64～66は同一個体と考えられる資料である。器形は胴上部に緩いくびれ部をもつキャリバー状を呈すると考えられるもので、口縁部は平縁で、口唇上には異型ともいふべき瘤状突起を配している。文様は上部文様帯と下部文様帯とに区分けすることができる。まず、上部文様帯を形づくっているソーメン状の細い粘土紐の貼付は、口唇上の瘤状突起と口辺・頸部部分に集中してみられる。まず瘤状突起には中央に一孔を穿ち、その孔を中心にして放射状に粘土紐を貼りつけ、さらにその外周を三条の粘土紐によって貼付している。口辺および頸部の無文帯部分においては、口縁直下と頸部付近に下部文様帯との区分けのために配された断面三角の隆帯の上下に、各一条ずつの横走する細いソーメン状の粘土紐を貼付し、その中の口辺には、長さ1cmに切った細い粘土紐を左から右へと繋いで貼付した連続的鋸歯状貼付文というべきものを施している。また下部文様帯は、上部文様帯が横走するように構成されていたのに対して、縦の構成をもち、両端に結節を有する結束のあるR撚りの縄文が胴下半にむかって間隔をあけて施されている。胎土には石英・長石粒を多量に含んでいるとともに、雲母片の混入も認められ、あまり緻密とはいえないが焼成は堅牢である。67は同様の胴部破片である。下部文様がよくわかる。やはり両端に結節のある結束R撚りの縄文であり、無文部分が前のものに比して少し広くとってある。焼成は良好であるが、胎土に砂粒を目立って含んでいる。

##### 第2類（68～70）

沈線文と交互刺突文、および沈線文に沿う刺突文をもつグループである。図示した3例の小破片が検出されている。器形は小破片のため定かではないが、深鉢形を呈していたのかもしれない。文様は口唇に刻目を配し、棒状工具による刺突を施したり、沈線の区画に沿って刺突文を組合せたりしたものであり、交互刺突のみみられる資料はわずか1例にとどまる。焼成はいずれも良好といえるが、胎土は70の資料が小砂利を多く含んでおり、他の2例とは異なりをみせ



第4図 宝導寺台貝塚出土の土器(4)

ている。70の資料は他からの搬入品かもしれない。

### 第3類（81・82）

器一面に縄文を施している類である。本土器群の中では最も多く検出されているグループである。しかしその大半は破片であり、図示したものは器形のはぼわかる2個体である。81は、口縁部が頸部のところで緩く外にくびれる平口縁の深鉢形土器である。底部は欠損している。現存高26cm、口径25.4cmを計る。器面には、前期最終末に位置づけられると考えられる土器群の中の第5類（無文の土器）に特徴的な縦ないしは斜行するヘラ削り痕がのこされており、その上に文様として、口辺から胴下半にかけて3cm余の原体のS字状結節のある単節L撚り斜縄文が重畳して施文されている。焼成はあまり良好といえず、胎土も石英・長石粒のほか砂粒を多く含んでいる。また82の資料は、口辺外面に、幅1.8cm余の粘土紐を廻らしている平口縁の小型深鉢である。81と同様底部が欠けている。現存高7.6cm、口径12.7cmを計る。文様は、口辺粘土紐帯を含めて器一面に結束のあるL・R撚りの羽状縄文が施されており、一部に結節様圧痕がみられる。焼成は堅牢であり、胎土も緻密である。

以上、中期初頭に含められると考えられる本遺跡出土の土器群について観察してきたが、これらをその特徴から型式別にまとめてみると次のごとくになる。すなわち、第1類としたソーメン状の粘土紐貼付によるモチーフ文様と縦の結節縄文との組合せをもつグループは、西南関東地域に分布の中心をもつといわれている十三菩提式の系譜の延長上に求められる五領ケ台式の古いタイプに、また第2類の沈線文と交互刺突文等との組合せのグループは典型的な五領ケ台式に、第3類の縄文をもつ土器群は、東関東に分布する下小野式にそれぞれ比定することができるようである。しかも、それぞれの類の量比は、第1・2類以上に第3類とした下小野式に比定されるグループが主体をなしており、第1・2類の五領ケ台式のグループより色濃くその存在位置を保つ傾向がみられる。

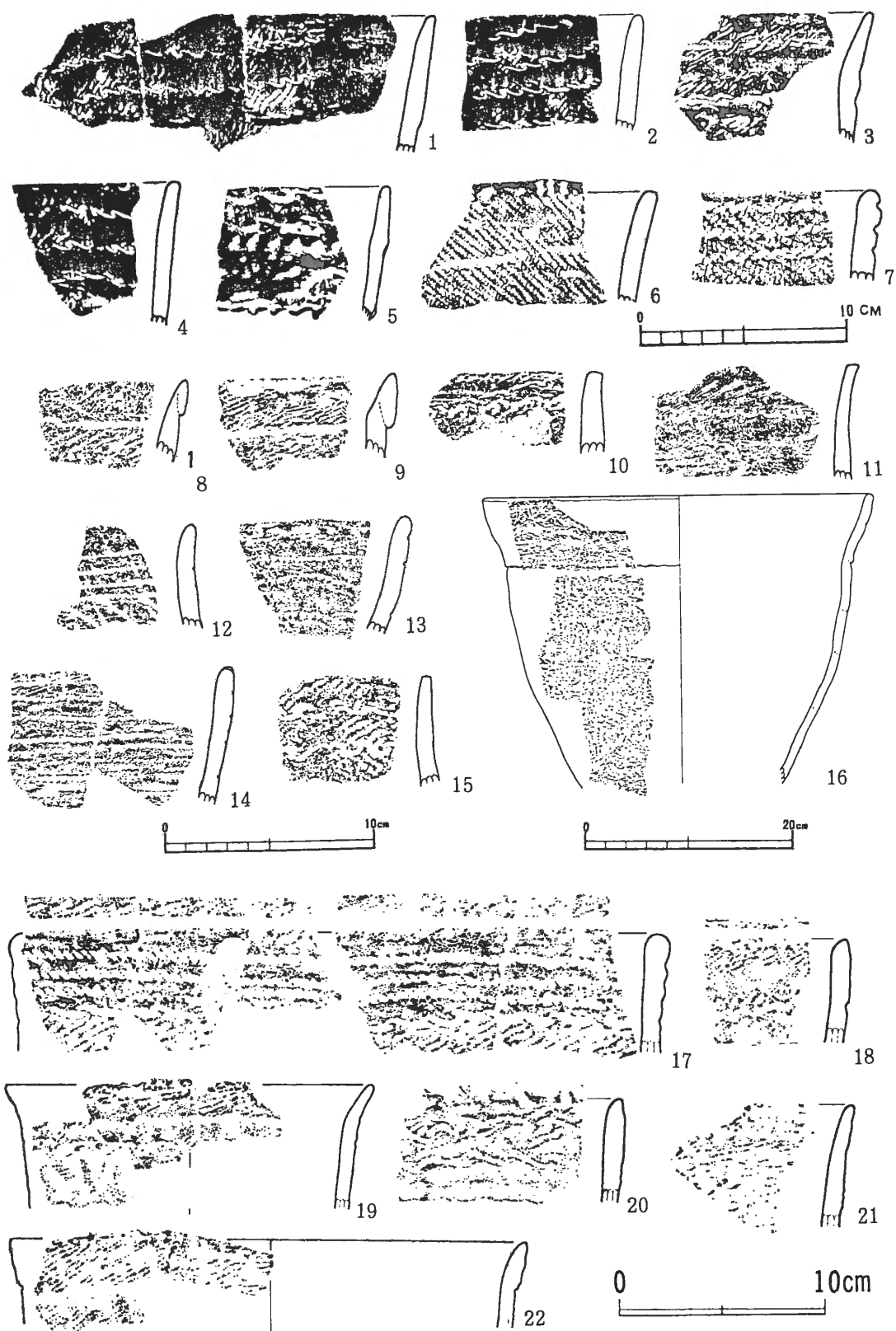
### Ⅲ 宝導寺台貝塚出土の土器にみられる傾向

前節で、本遺跡から出土した前期後半期から中期初頭にかけての土器群について、4群に分けて観察してきたが、ここでその出土傾向について調査範囲の制約による土器の偏在という可能性はあるものの、大要をまとめることにしよう。

まず、所謂浮島式土器群と諸磯式土器群とが併存する前期後半の時期においては、一口にいうと関東東北部に分布の中心をもつ浮島式土器群に比定されるものが主体を占めているといえる。すなわち、出土量の上からみると実に8割余がこの種土器であり、諸磯式土器はわずか2割程度の量を示しているにすぎなかった。しかも、量的に主体を占めている浮島式土器の中でも、圧倒的に多いのは洗練された波状貝殻文や三角文を主文様とすることで知られる浮島Ⅲ式に比定されるものばかりで、浮島Ⅰ・Ⅱ式とされるまばらな撚糸文や半截竹管を利用する「



第5図 前期終末期の土器(1) 1～8 水砂遺跡 9・10 藤沢遺跡 11～22 木の根遺跡



第6図 前期終末期の土器(2) 1~7 水砂遺跡 8~16 藤沢遺跡 17~22 木の根遺跡

沈線、幅狭・幅広の変形爪形文・波状貝殻文、さらには輪積みに指頭圧痕を施した指頭圧痕文などを組合せてモチーフ文様を描き出す類のものはいずれも少なく、まして、磨消貝殻文や腹縁押捺貝殻文、半截竹管の爪形文や変形爪形文、平行線文それに櫛歯条線文などの組合せ文様を特徴とする興津式にいたっては1例もみることができなかった。一方、量的に出土量の少なかった諸磯式土器においても、一応各型式に所属するものが少量ずつは認められたのではあるが、その中で、特に注意をされることは、他の浮島式土器を出土する遺跡ではほぼまちがいにその共伴が裏付けられている、所謂諸磯式をもっともよく代表しているといわれる地文にR・L撚りの縄文を施したり、無文地の上に縄文や細かい刻目をつけた浮線でモチーフ文様を描出す浮線文をもつ鉢形土器の存在が、資料にはみることができなかったという事実である。このような一連の資料の偏在傾向は、調査区域の制限ということにも起因しているものとも考えられるが、はたしてそればかりといえるのであろうか。なにか本遺跡での営みの上に、もっと別の意味あいがあったのではなかろうか。今後、周辺遺跡の状況とも考えあわせた検討に期待が持たれるところである。

次いで前期最終末の時期についてであるが、この時期の土器は千葉県全体を見渡しても、その多くは不鮮明な部分によって占められていた。つまり、この時期に位置づけられる土器として今までは、西南関東地方に分布の中心をもつことで知られている十三菩提式土器が、いくつかの遺跡からわずかに出土するのが報告されているにとどまり、該土器の分布圏の中に抱括されているものと考えられてきていた。確かに本遺跡からも、地文縄文の上に粘土紐を貼り付け、その上に連続爪形文を施すといわれる典型的なものはみられないものの、ソーメン状の粘土紐貼り付けによるモチーフ文様をもつものや、口辺に三角状の陰刻を施したものなど、明らかに十三菩提式の範疇に含まれるものが、少しではあるが検出されており、その事実を裏付けてはいる。しかも、該時期に先行するものとして周知のように千葉県下における前期後半の時期に、一方には関東東北部に分布の中心をもつ浮島式土器群と、他方、西南関東地方に分布する諸磯式土器群との二系統の土器群が共存ないしは併存する形で存在していたことが明らかにされてきており、中期初頭にもこの系譜は受け継がれていくことから、このような中での十三菩提式土器の単一の存在について土器編年上での不自然さがあった。すなわち、この十三菩提式土器は諸磯式～五領ケ台式の系譜を埋めるものとしては理解できうるものの、もう一方の系統をたどる浮島式～下小野式の間を埋めるものとはなりえないのである。ここにおいて、本地域では最近この十三菩提式土器と共存しながらも、そのもっている器形、文様上の単純さ、中期初頭の下小野式との類似性等の事由から、十三菩提式ないしは下小野式に伴う土器群としての理解のみで、その内容解明にまでいたらなかった深鉢形の無文ないし縄文だけを施す土器群に目が向けられはじめてきているのである。すなわち、その器形は大部分が平口縁の深鉢形を呈すると考えられるもので、口辺外面に粘土帯を廻らしているものもあり、器面は整形のための縦ない

し斜行するヘラ削り痕をのこす粗いつくりの土器で、そのまま文様といえるものを施してないものや、文様を施してはいても、器面全体に結節を有する斜縄文や羽状縄文を横方向に施文したり、縄文原体を押捺する側面圧痕をもつものを特徴としている土器群なのである。各遺跡での出土量は、遺跡毎の編年には問題があるものの、比較的まとまりをもって検出されており、この種土器が安定した位置を占めていることがうかがい知れる。たまたま、本遺跡でもこの種資料が量的にも多く、好資料に恵まれていることもあり、他遺跡のものとあわせて、少しく後述して検討してみたいと考えている。

また、中期初頭期の土器としては、本遺跡では西南関東に中心的に分布する五領ヶ台式土器と東関東地方の土着土器である下小野式土器との両者の存在がみられる。しかし、いずれも資料が量的には少ないものでその内容が乏しく、ここでは両者が共存して検出されたという事実のみにとどめておくことにする。

以上、本遺跡における出土土器の傾向について概観してきたが、ここで先に触れた前期最終末の所謂『土着の土器』ともいえるような一群の土器について、千葉県下でのその在り方をみてみることにしよう。

第5・6図は県内出土の前期終末期に位置づけられると考えられる土器である。図示した資料は柏市水砂遺跡、千葉市藤沢遺跡、成田市木の根遺跡など県央から県北に所在する3遺跡のものであるが、館山市慈恩院遺跡、丸山町加茂遺跡のような、ごく南の地域から県央の千葉市屋久喜遺跡、同高品第2遺跡、同文六第1遺跡、さらに県北の印西町木刈峠遺跡、同船尾白幡遺跡、高根北遺跡、石道谷津遺跡、白井町一本桜遺跡、小見川町白井雷貝塚、同下小野貝塚などにいたるまでほぼ全県的にその存在をみることができる。しかし、報告の中には、これらの土器をもって『前期末から中期初頭にかけての土器群』として一括図示するのみで、その共存関係や内容の詳述を省いているものが多く、中には、これらの土器を前期後半期の浮島式・諸磯式土器群に伴うものとして記述しているものすらみられたのである。しかし、資料累積がこのように進められてきた現在、ただ単に『前期末から中期初頭にかけての土器群』としてのみの認識では不備極まりないことであり、ここに真に妥当性のある土器編年の中での位置づけが最重要課題になってくるのである。

そこで、本稿では、先におこなったこの種土器群の細分を再確認するとともに、諸磯式と浮島式とのどちらの流れの中において位置づけていくことが妥当なのかを考えてみたいと思う。

まず、この種土器群を器形の上からみてみよう。いずれも口辺は直口ないしは緩く外反する深鉢形を呈しており、胴部に膨みをもつものともたないものがある。口縁部は平口縁のものが多く、口辺外面には幅2～5cm余の粘土帯を廻らし肥厚させているものもあり、複合口縁様の作り出しがみられる。

また文様の的には、文様をもたないものともつものとの大別されるようである。文様をもたな

いものは、器面に土器製作時の痕跡として、縦ないし斜行する荒々しいヘラ状工具による削り痕をのこすのを特徴としており、全体として粗野な感を与えている。口唇部にはヘラ状の工具を使った刻目や押捺のあるものもみられる。文様のあるものとしては、器面に縄文のみを施すもの、縄文原体の側面圧痕を施すもの、さらにヘラの先端で直線的な鋸歯文を描くものなどがみられ、なかにはこれらの文様要素を組合せて施したものもみられる。縄文は、そのほとんどがR・L撚りの単節の原体を用いており、長さ3cm余りの縄の両端に結節を有したり、結束第1種のあるものもあり、器面に横走させて、羽状ないしは斜行縄文を描出している。また側面圧痕は、口辺に沿って横位に施文されるのを常とし、単節撚りの原体を直接器面に押捺したものと同転押捺したものとの両者がみられる。ヘラによる鋸歯文も口辺に施されるのが一般的なようであり、十三菩提式土器にみられる三角状陰刻の祖形ともうけとれる。これらの土器の口唇部には、縄文が施文されるものや縄原体を直接押しつけたものもあり、先の文様をもたない土器の口唇部の施文技法に通ずるものがあるようである。胎土については地域差もあり一定していないが、焼成は比較的堅牢なものが多いようである。

さて、このような器形、施文文様の上からの特徴をもつ土器群なのであるが、はたして諸磯式、浮島式のどちらの系統に属しているのだろうか。再度この種土器のもつ諸特徴を考えてもらいたい。

第1に口辺外面に粘土帯を廻らしていること。これは諸磯式土器群の系統の中にはみられない特徴である。しかし一方、浮島式土器群の中にはその事例は存在している。すなわち本遺跡の資料中にもみられるごとく、浮島Ⅲ式の波状貝殻文や三角文をもつ土器の口辺外面の粘土帯がそれなのである。しかもこの特徴は本遺跡のものばかりではなく、船橋市古和田台遺跡をはじめとして水砂遺跡、藤沢遺跡など多くの遺跡にその存在をみることができ、興津式、浮島Ⅱ式をはじめ、その上限期のものとしては、千葉市文六第1遺跡の浮島Ⅰ式に比定される器一面に稚拙な波状貝殻文をもち、胴上部に半截竹管による平行線文をもつ深鉢にいたるまで浮島式土器群各式にみることができるのである。だからといってこの粘土帯の在り方を、浮島式土器群の特徴の一つとして存在する輪積痕と同一視することはできないのである。なぜならば、輪積痕は製作の過程において意識的に外側の粘土接合部分を強調していったのに対し、ここで問題としている口辺外面の粘土帯のほうは、新たに口辺部分に限って幅の広い粘土紐を貼りつけているからなのである。この製作技法上の違いを正しく見極めることが、この種土器の在り方を知る一つの手がかりとなるのである。

第2として、器形のほとんどが単純な平口縁の深鉢形を呈していることである。このことも諸磯式土器群といわれている土器が、その多くを多様な器形で占めているのに対して、明らかに浮島式土器が単一器形に近い深鉢によってその大部分が占められていることから、浮島式土器群の系列上に包括されるものであることが容易に理解されるであろう。

また、最後に文様についてであるが、すでに再三にわたって述べているように、この種土器は文様に乏しく、文様のあるものでも結節や結束第1種を有する縄文であったり、縄原体の側面圧痕であったりしており、該時期の十三菩提式土器との関わり合いを考える時、一概には速断しかねるものがある。しかし、継続する中期初頭の下小野式への展開を前提とするならば、文様自体は諸磯式土器群の影響を受けながらも、浮島系の土着土器としての位置づけが与えられてもよいように考えられる。

斯様なことから、ここで扱ってきたこの種土器を浮島式土器群の系譜上に存在する本地域の前期最終末の土器群として理解したいと考えるのであるが、まだ、未整理の部分があるため、ここではそれを示唆する段階に止めておくことにする。今後、さらに具体性をもった資料の蓄積が行われ、そこにこの時期を埋める型式設定がなされるのが待たれるところである。

千葉市教育委員会文化課

#### 参考文献

- 江坂 輝弥 「講座 縄文式文化について」(9～13) 歴史評論 1951  
「相模・五領台貝塚調査報告」 考古学集刊第1巻3号 1949
- 三田史学会 「加茂遺跡」 考古学・民族学叢刊第1冊 1952
- 西村 正衛 「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」 早稲田大学教育学部学術研究 第15の1号 1966  
「茨城県取手町向山貝塚」 早稲田大学教育学部学術研究 第16号 1967
- 西村正衛 金子浩昌  
「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚」第2・3次調査 早大教育学部学術研究 第3号 1954
- 篠遠喜彦 江森正義 岡田茂弘  
「千葉県下小野貝塚発掘報告」 考古学雑誌 第36巻 第3号 1950
- 古和田台遺跡調査団  
「古和田台遺跡」 1973
- 樋口清之 麻生 優  
「十三菩提遺跡」 埋蔵文化財発掘調査報告 2 1971
- 山口 明 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」 駿台史学 第43号 1978
- 大場磐雄他 「千葉県銚子市栗島台石器時代遺跡調査報告」 千葉県銚子市公正市民館 1952
- 大場 磐雄 「栗島台遺跡」 銚子市教育委員会 1974

川崎純徳 鴨志田篤二

「遠原貝塚の研究 本編 1」 1980

庄司 克 「千葉市都町 宝導寺台貝塚発掘調査概報」 貝塚博物館紀要 第 3 号 1970

寺門 義範 「関東地方東部浮島式土器群の再検討」 霞ヶ浦文化 2 号 1977

「千葉県下における縄文時代前期後半期の諸問題(1)」 貝塚博物館紀要 第 9 号

1983

財団法人千葉県都市公社

「高品第 2 遺跡」 京葉 1973

「星久喜遺跡」 京葉 1973

「一本桜遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅱ 1974

「石道谷津遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ 1975

「木刈峠遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅳ 1975

財団法人千葉県文化財センター

「飯山満東遺跡」 1975

財団法人千葉県都市公社

「高根北遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ 1976

財団法人千葉県文化財センター

「船尾白幡遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅵ 1976

「佐倉市星谷津遺跡」 1978

「藤沢遺跡」 千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡 1979

「木の根」 1981

「水砂遺跡」 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告 1 1982